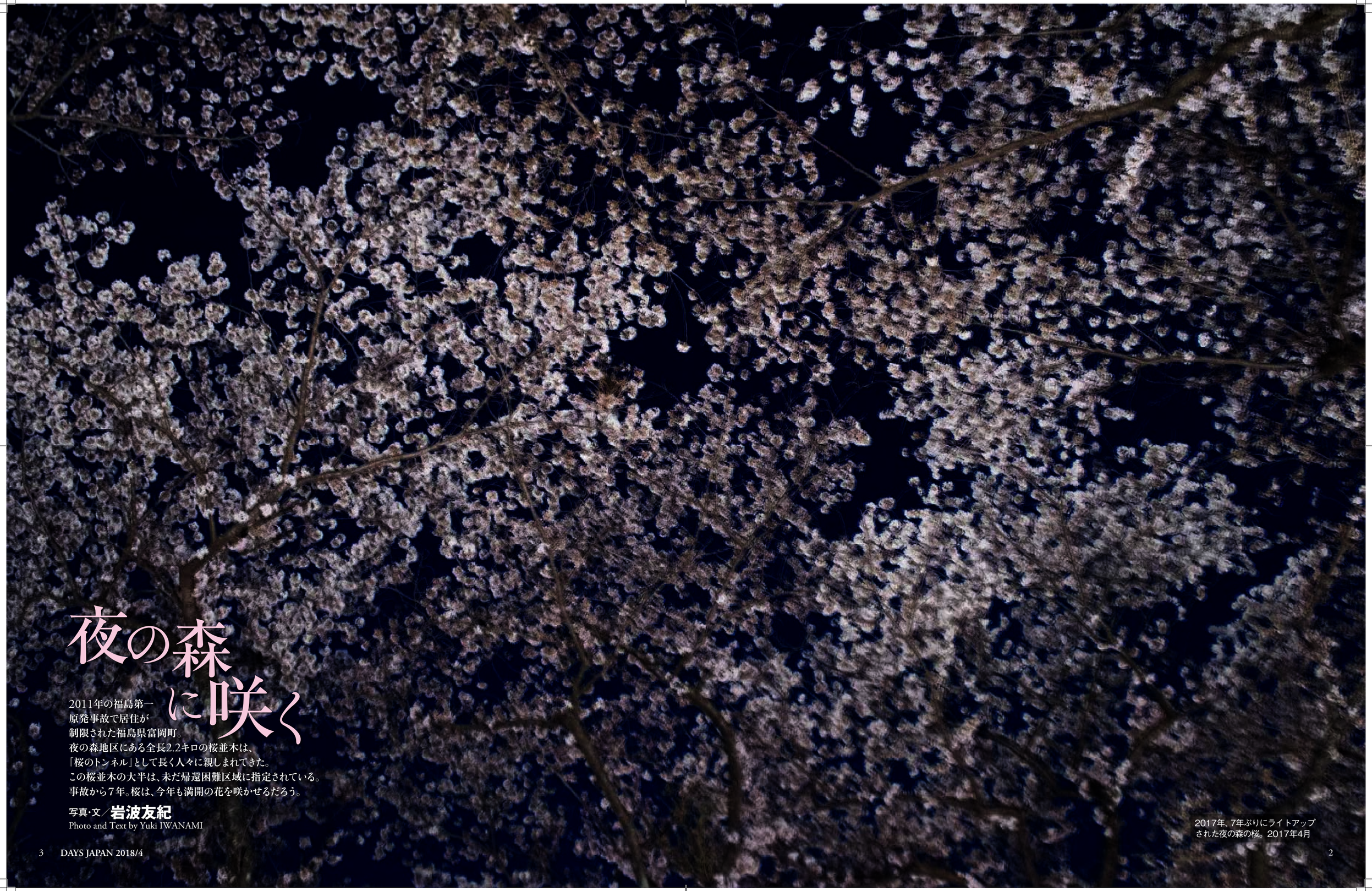


夜の森に咲く

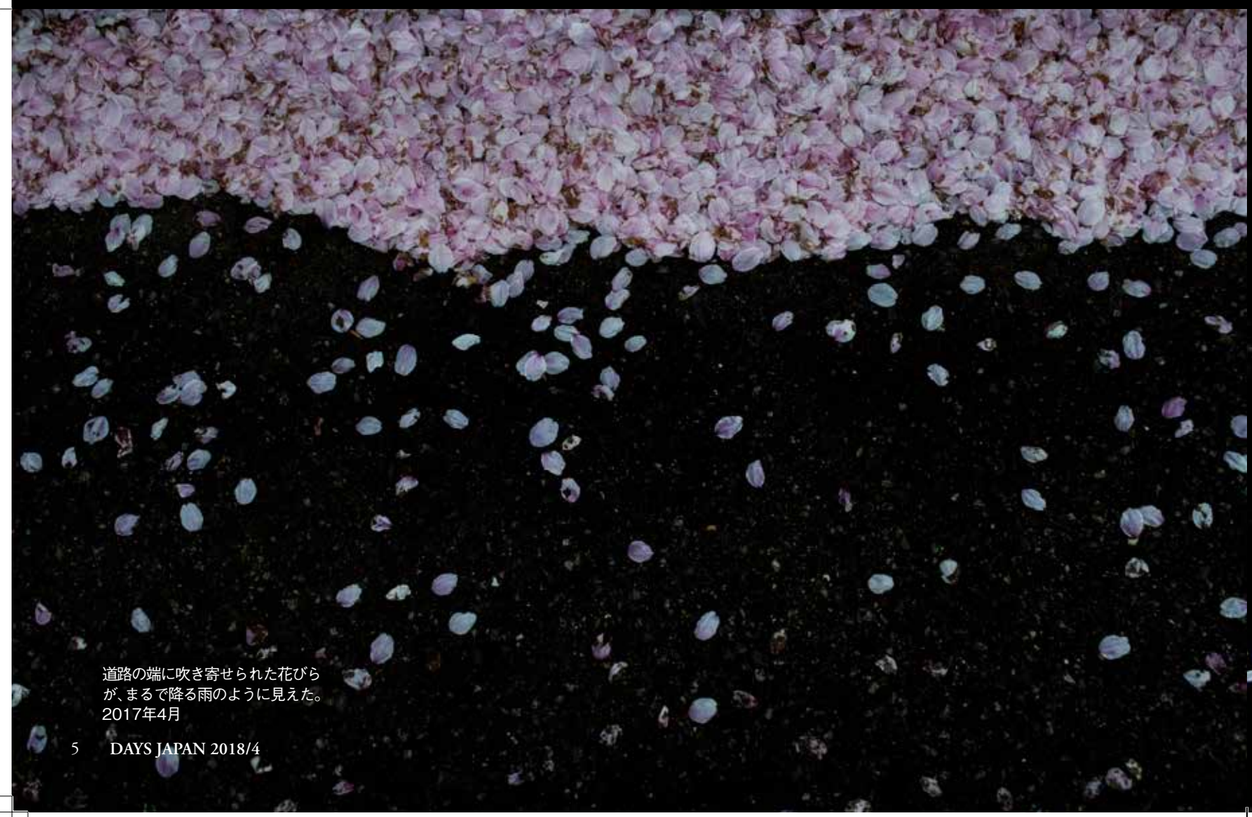
2011年の福島第一
原発事故で居住が
制限された福島県富岡町。
夜の森地区にある全長2.2キロの桜並木は、
「桜のトンネル」として長く人々に親しまれてきた。
この桜並木の大半は、未だ帰還困難区域に指定されている。
事故から7年。桜は、今年も満開の花を咲かせるだろう。

写真・文／**岩波友紀**
Photo and Text by Yuki IWANAMI

2017年、7年ぶりにライトアップ
された夜の森の桜。2017年4月

4_P2-7_fukushimasakura_seki.indd 2-3 2018/03/07 21:27

雨に濡れた桜の花が、ライトで浮かび上がる。2017年4月



道路の端に吹き寄せられた花びらが、まるで降る雨のように見えた。2017年4月

風に舞い、散り落ちた桜。2017年4月

4_P2-7_fukushimasakura_seki.indd 4-5 2018/03/07 21:27

人が避難して去った夜の森地区を闊歩するキツネ。2015年4月

帰還困難区域内の桜並木を歩く住民。このエリアの桜は一時帰宅の住民などしか見ることができない。2017年4月

目もくらむほどの、凛とした姿

福島県富岡町の桜の名所「夜の森（よのもり）の桜」を私が初めて見たのは2013年。東京電力福島第一原発事故で、富岡町は全町が避難区域になった。その避難区域がこの年に再編され、この桜並木の一部が日中のみ立ち入りができる区域になったからだ。一直線に続く道の両側に並ぶソメイヨシノが、桜のトンネルになっている。

こんな見事な桜の名所に人の姿がほとんどないことはとても奇妙であり、ここがまだ避難区域であることを嫌でも感じさせた。並木の端から300メートル歩けば、道を塞ぐバリケードにぶつかる。この再編で、避難区域は放射線量によって3つに分かれた。全長約2・2キロの桜並木のうち、この300メートルは住むことはできないが日中は立ち入りができる「居住制限区域」だが、その先は最も放射線量が高い「帰還困難区域」で許可なく入ることはできない。夜の森の桜並木は見えない放射線で分断された。

当初、高い放射線量を理由に「観桜は車の中から」と促す看板が立てられていた。町民が夜の森の桜を見るために町が用意したバスは、止まって乗客をおろすこともなかった。

それから毎年桜の時期に夜の森に通った私は、年々訪れる人が増えてきたことを感じた。時折、桜を見上げている人たちに来た理由を聞くと、「震災前は毎年見に来ていたのでどうしても見たくて」という答えがほとんどだった。多くが富岡町の人や浜通り地区の近隣市町の人だ。思い出のある桜を見上げる人たちは、柔らかい顔をしていた。

「踊る？」「踊ろっか？」。14年春、周囲の様子を見ながらにわかに桜並木の真ん中で踊り出したのは、桜色の鮮やかな衣装を着た女性ふたり。彼女たちは富岡町のYOSAKOIチームのメンバーで、震災前、毎年この桜並木でおこなわれていた「桜まつり」では、チームで踊りを披露していたという。「あの頃の風景を知っているから切ない気持ちがあふれる。でも、4年ぶりに踊れたことはうれしかった」と話す彼女たちの笑顔に、夕日があたっていた。

17年4月、帰還困難区域を除く富岡町の避難指示が解除された。「富岡町復興の集い」が町内で開催され、この日、桜並木が埋まるほどの人で賑わった。そこには、7年ぶりにここでの祭りで舞うYOSAKOIチームの姿があった。

一部を除く避難指示が解除されてまもなく1年が経つが、富岡町の居住者は3月1日現在で震災前のおよそ3パーセント弱。町での生活を再開することは簡単ではないことを物語る。帰還困難区域は変わらず避難指示が続く。それでも故郷を取り戻すために懸命に動いている町民たちを少なからず知っている。

夕暮れ時に桜並木ではしゃぐふたりの子どもたちを連れた母親がいた。原発事故で隣の大熊町から避難している彼女も、震災前は毎年夜の森の桜を見に来ていたという。「避難指示が解除されたので、初めて子どもたちを連れて来ることができた」と話す。震災後途絶えていた桜のライトアップも、300メートルだけ復活した。闇に浮かび上がる花々を初めて見上げて、思わず「夜の森」という名前を反芻した。夜に見る姿が本当のこの桜なのだと思ったのだ。

高い放射線があっても、人がいなくなってしまっても、花は毎年変わらず咲いてきた。それは目もくらむほどの凛とした姿だ。人間は自分たちで勝手に放射性物質を作りだし、自分たち自身に被害をもたらし右往左往してきた。桜の木はそれを横目に、この地で静かに生き、花を咲かせ続けている。

バリケードで分断された桜並木。この先は帰還困難区域で許可なく立ち入れない。2017年4月

杉本裕紀さんら「チーム富岡さくらYOSAKOI」のメンバーたちとは2014年以降毎年会った。観客がいない中で踊る。2016年4月

初めて子どもと訪れた大熊町の吉崎沙紀さん。高校生のときには母と妹と3人でライトアップを見に来ていた思い出を話してくれた。2017年4月

いわなみ・ゆき

1977年長野県生まれ。大手新聞社のフォトグラファーを経て、フリーのフォトジャーナリスト。福島市に居を構え、東日本大震災と福島第一原発事故の取材も続ける。コニカフォトプレミオ、Critical Mass Top 50, Tokyo international photography competitionなど受賞。DAYS国際フォトジャーナリズム大賞2018審査員特別賞受賞。夜の森の桜を題材にした写真集「NIGHT FOREST 17」を3月下旬に発売予定（詳しくはwww.thephotojournal.org/nightforest17）

4_P2-7_fukushimasakura_seki.indd 6-7 2018/03/07 21:27